

唐古・鍵遺跡第58次調査から出土した動物遺存体

北海道大学総合博物館

江田 真毅

大阪市立大学大学院医学研究科

安部みき子

東海大学海洋学部

丸山 真史

田原本町教育委員会

藤田 三郎

1. はじめに

唐古・鍵遺跡では多数の動物遺存体が出土しており、これまでに魚類、両生類、哺乳類の一部について報告されており、当遺跡一帯の環境復元や集落における動物利用について、徐々に明らかになりつつある。

今回報告する唐古・鍵遺跡第58次調査出土の弥生時代の動物遺存体のうち、種類や部位などを同定したものは魚類2点、両生類10点、鳥類14点、哺乳類168点である。特筆されるのは、第58次調査において弥生時代中期の遺構からニワトリが出土していることである。管見の限り日本国内で最古級の家禽の利用となり、注目に値する。以下では、第58次調査の概要および出土した動物遺存体について報告する。

(丸山)

2. 第58次調査の概要

(1) 調査の概要

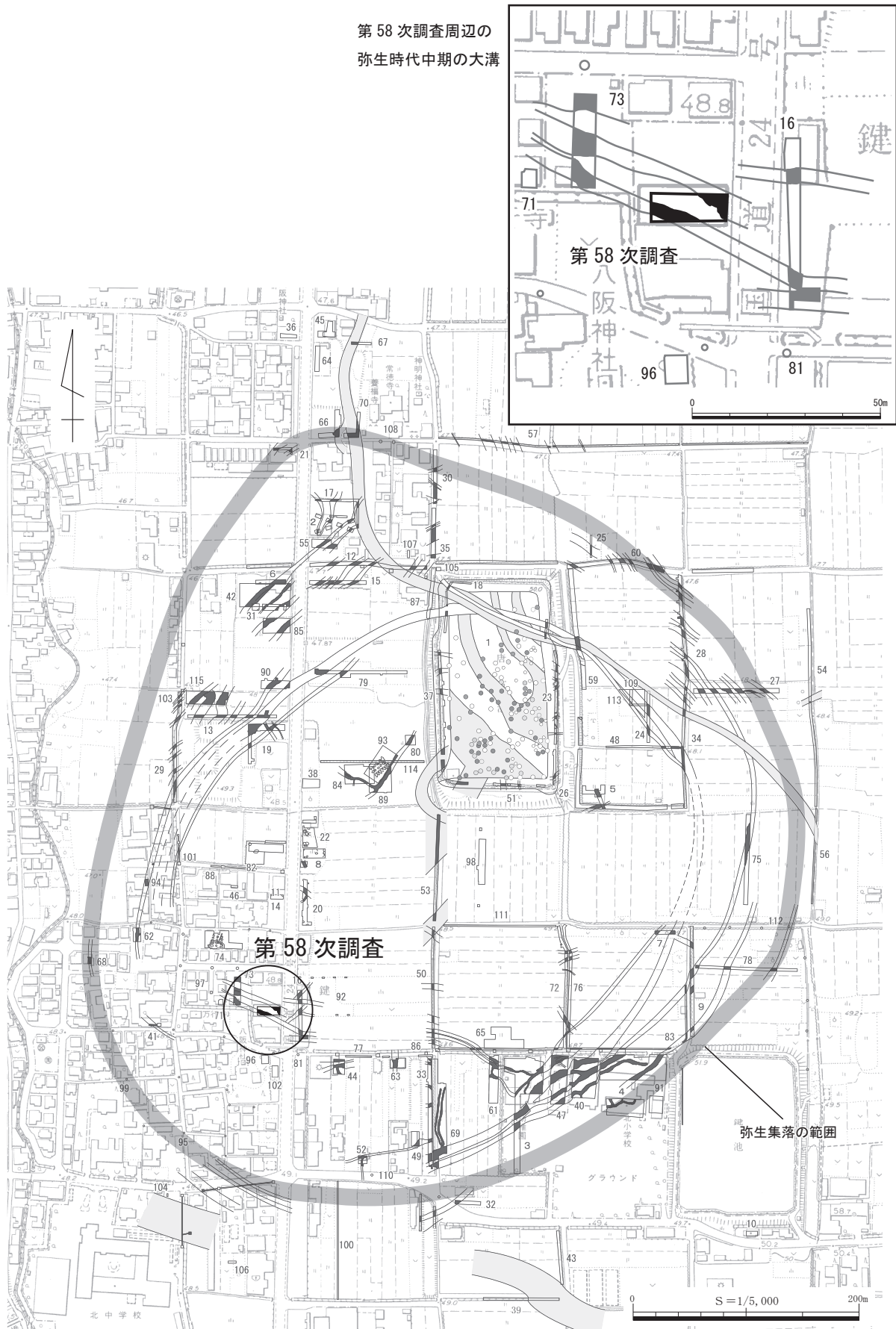
唐古・鍵遺跡の調査は、2015年12月現在、117次を数える。これまでの調査から唐古・鍵遺跡は、弥生時代の拠点的な大環濠集落であることが判明している。また、検出された遺物は多種多様で膨大な量になっている。

今回報告する動物骨は、唐古・鍵遺跡の第58次調査の区画溝や井戸等の各遺構から出土したものである。本調査地は、唐古・鍵遺跡の西部を南北に縦断する国道24号の西側沿線で、大字鍵字垣内281番1にあたる。店舗付賃貸住宅の建築に伴う事前調査として、1995年8月17日～9月28日にかけて実施した。調査面積は、東西20m、南北6.6～7.6mの138㎡、遺物は遺物箱180箱である。

本調査地は、唐古・鍵弥生集落の西地区にあたり、周辺約30mの範囲内では第16・73・81・92・102次と比較的多くの調査を実施している。この西地区の微高地は、弥生集落の西半部を占め、東半部にある北地区や南地区の微高地と比して大きい。この西地区の微高地は、南南西から北北東方向に主軸をもつもので大きく、北部・中央部・南部の3つに分けることができる。今回の第58次調査地は、その中央部と南部の境界部分にあたり、後述するように両者を区画する溝が検出されている。

調査では、下記に示すとおり弥生時代前期から後期までの土坑や溝、柱穴と中世の大溝や土坑を検出した。弥生時代の遺構は集落内の居住関係の遺構、中世は「唐古南氏居館」関係の遺構と考えられる。ここでは、報告する動物骨が出土した弥生時代の遺構を中心に述べるが、これら弥生時代

第58次調査周辺の
弥生時代中期の大溝



第1図 第58次調査地位置図（遺跡全体：S=1/5,000、第58次調査周辺：S=1/1,500）

の遺構は中世遺構に多くを削り取られており、良好な部分は半分程度となっている。動物骨は、残存した遺構の下部の粘土層を中心とする土層から出土している。

弥生時代前期 (大和第Ⅰ様式)：木器貯蔵穴1基・小土坑・柱穴・大溝1条

弥生時代中期初葉 (大和第Ⅱ様式)：大溝1条・落ち込み1条

弥生時代中期中葉 (大和第Ⅲ様式)：木器貯蔵穴1基・小溝

弥生時代中葉後葉 (大和第Ⅳ様式)：井戸2基・土坑

弥生時代後期初葉 (大和第Ⅴ様式)：井戸2基

鎌倉～室町時代 : 土坑4基・大溝1条

(2) 弥生時代の主要遺構の概要

弥生時代前期

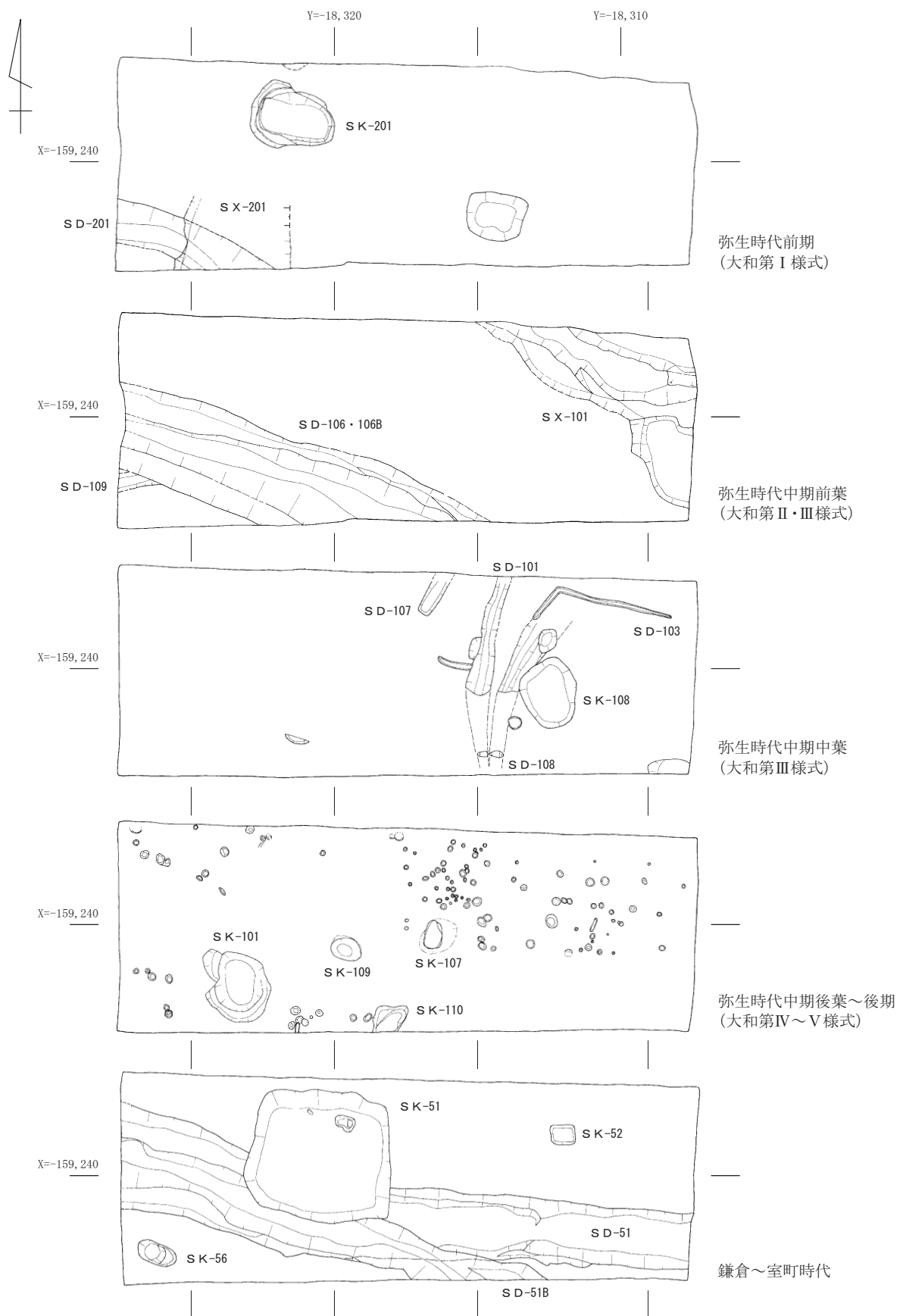
S K-201 調査区の西北で検出した楕円形を呈する大型の穴である。主軸は東南東－西北西方向にあるが、土坑上面の南肩はS D-51に、東半はS K-51の中世遺構に削平され、3/4を失っている。推定規模は長軸3.3m、短軸2.4m、深さ1.1mを測る。堆積は大きく二分され、上層は灰褐色砂質土等、下層は暗灰青色微砂等で形成され約0.7mの厚さを有する。下層は黒色粘土、灰色粘土等のブロックが混在することから、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は上層と下層の間に広鉢の未成品が1点、上層内からはややまとまって土器が出土している。時期は大和第Ⅰ-1様式で最も古い。遺構の形態や遺物の出土状況から木器貯蔵穴と推定される。

S D-201 調査区の西南隅で検出した大溝で、東南東－西北西方向に主軸をもつ。溝の上面はS K-115やS D-106に切られ、正確な規模は不明である。推定溝幅2.5m、深さ1mを測る。溝の堆積は大きく3層に分層でき、上層は暗灰黄色粘質土・中層は黄灰色微砂～暗褐色粗砂・下層は黒褐色粘土等で構成されている。遺物は下層から木製容器3点・手斧柄などが出土しているが、全体に遺物は少ない。時期は大和第Ⅰ-2様式である。集落内部を区画する溝と考えられる。

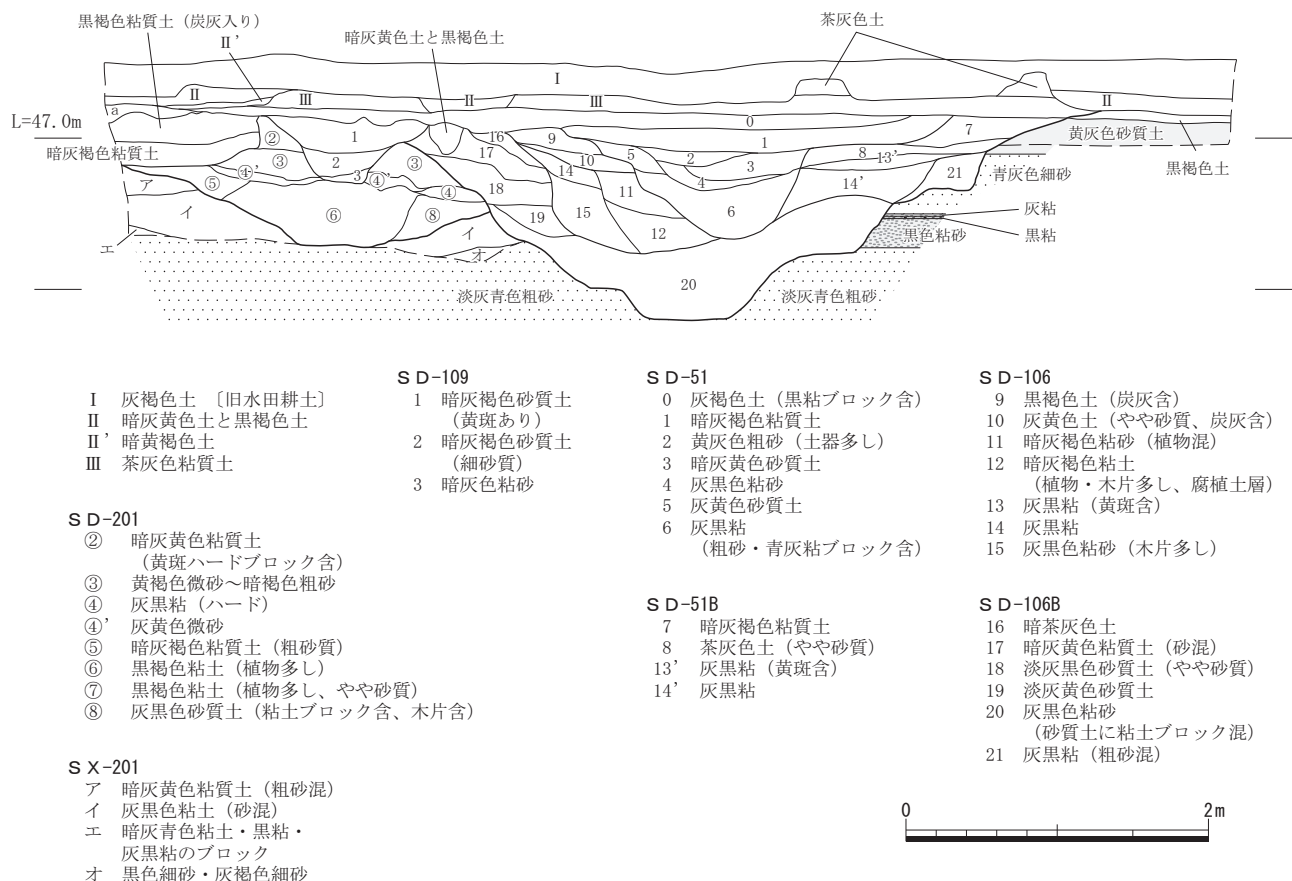
弥生時代中期

S D-106B・106 調査区の西南隅で延長15mにわたって検出した大溝で、今回の調査の弥生時代の遺構としては、最も主要な遺構である。前述S D-201の北側にはほぼ平行するように（東南東－西北西方向）、すなわち、前期のS D-201の北側の肩を一部壊しながら掘削しているが、また、逆にこの大溝の大半は後述する中世大溝S D-51に重複するように掘削・破壊されており、本溝の上層の残存状況はかなり悪い。溝の堆積状況から再掘削されていると判断され、最初の掘削溝S D-106Bは（取上層位：第7～10層）は大和第Ⅱ-1・2様式の土器を主体とし、再掘削溝S D-106は（取上層位：第1～6層）は大和第Ⅱ-3様式を主体とし、部分的に大和第Ⅱ-1・2様式の土器が混在する状況にある。このような状況であるが、大和第Ⅱ様式期に収まる遺構と判断して良い。規模は当初の溝が幅約4m、深さ1.3m、再掘削は推定幅3m、深さ0.9mを測る。当初の溝は灰黒色粘土、再掘削の溝は暗灰褐色粘砂層（植物腐食土層）等で構成されており、後者の土層からは大量の土器のほか、容器片、鉢片、筥、板材、骨針・報告する獣骨類が出土している。この大溝はその位置関係から第16次調査のS D-102と考えられる。

S K-101 調査区の西南で検出した大型井戸である。井戸の北半はS D-51によって大きく削



第2図 遺構変遷図 (S=1/200)



第3図 調査区西壁断面図 (S = 1/50)

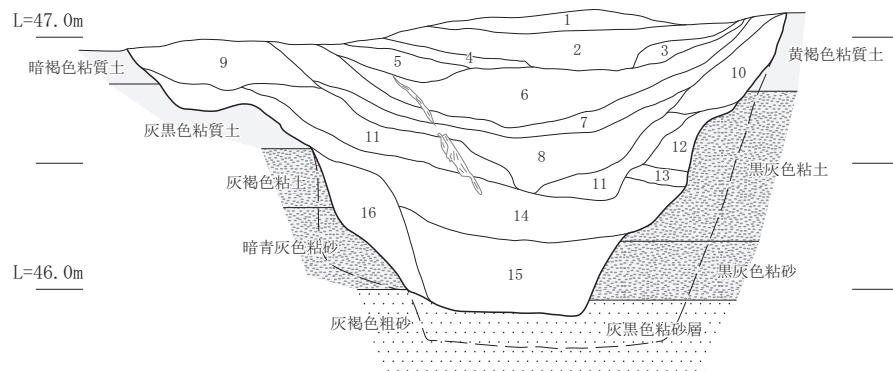
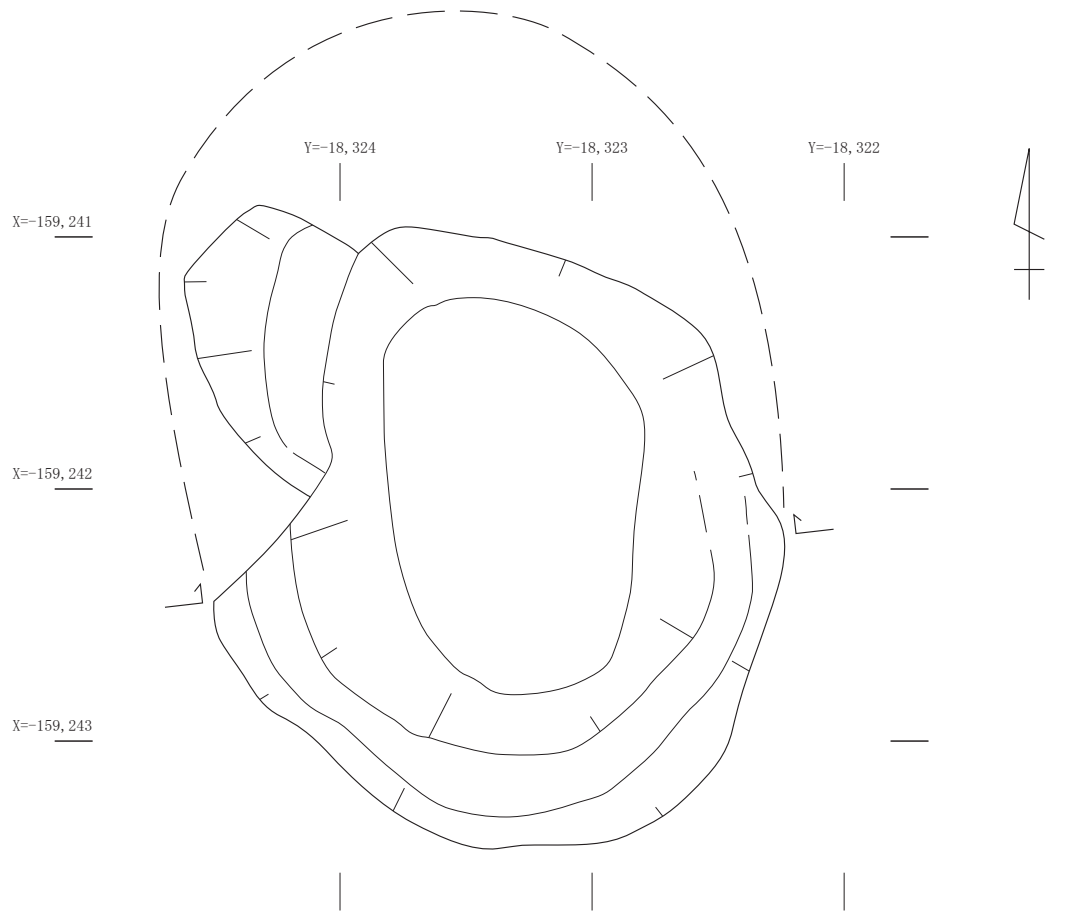
られ失われている。また、大溝 S D-106の南肩を壊している。平面形態は楕円形で、逆台形の断面形態を呈すると思われる。長軸推定2.8m、短軸2.3m、深さ1.35mを測る。堆積は下層の黒褐色粘砂、中層の灰黒色砂質土等が埋積した後、再掘削され灰黒色粘質土 (上層) が堆積する。遺物は最下層から石小刀、上層下位から土器片がまとまって出土した。時期は大和第Ⅳ-1様式である。

S K-107 調査区のほぼ中央で検出した楕円形の平面プランの井戸である。井戸の南半は S D-51に削られている。長軸1.1m、短軸0.65m、深さ0.75mを測る。ただし、井戸の下部は、壁の細砂層が崩落したため袋状になっている。井戸の底面には直径8cm、深さ4cmのピットがあり、井戸に覆い屋があった可能性がある。また、この井戸と関連するかどうか不明であるが、井戸の北側には人頭大の平たい石がある。井戸の埋土は黒灰色粘質土、暗褐色砂質土等で構成されている。時期は大和第Ⅳ-1様式である。

弥生時代後期

S K-109 調査区の中央やや西側で検出した井戸である。井戸の上面と南半は、中世の S K-51と S D-51によって削られている。このため、規模は正確におさえられないが、直径1.1m、深さ1.1m前後と推定される。埋土は、下層が暗灰色粗砂、中層が灰黒色粘砂層、上層が黒灰色粘土で構成される。遺物は中層から多く出土したが、おもに木材と土器片である。時期は大和第Ⅴ-1様式である。

S K-110 調査区の南端中央で検出した井戸である。この井戸は、S D-106の南肩の一部を壊して掘削されている。平面形態は楕円形を呈すが、本来は円形で北西側に楕円形の立ち上がり部が



- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 暗茶褐色土 | 10 灰黒色粘質土 (炭灰混) |
| 2 暗褐色粘質土 (炭灰混) | 11 灰黒色砂質土 |
| 3 灰褐色砂質土 (炭層) | 12 黒灰色粘土 (微砂質) |
| 4 黒色粘質土 (炭灰層) | 13 灰褐色粘質土 (細砂質、植物層) |
| 5 灰黒色粘質土 | 14 灰黒色砂質土 (粘土質) |
| 6 灰黒色粘質土 (砂粒多し) | 15 黒褐色粘土 |
| 7 暗灰褐色粘質土 (炭灰層) | 16 黒褐色粘砂 |
| 8 暗青灰色粘土 (微砂層) | |
| 9 暗茶灰色粘質土 | |



第4図 SK-101平面図および北壁断面図 (S=1/30)

ついたものと考えられる。断面は上部が広がるが円筒状である。長軸の現長1.4m、短軸復元推定0.7m、深さ1mを測る。埋土は基本的に黒色粘土の水平堆積であるが、最下層は砂混じり、下層は木片を含み、中層は柔らかい土質をしている。最下層から完形の短頸壺が出土した。時期は大和第V-1様式である。

(3) まとめ

本調査において、主要遺構となるSD-106B・106は、調査地東側20mの第16次調査で検出したSD-102、さらに東100mの第77次調査のSX-3101に接続すると思われる。また、反対方向にあたる西側20mの第73次調査のSD-106に繋がると推定されることから、本溝の総延長は190mとなる。この大溝は、東南東から西北西方向にほぼ直線的に掘削されており、この溝とほぼ並走する大溝も近くに存在することから南地区の北辺を区画するとともに、西地区の中央部と南部も区画すると考えられる。いずれにしても本溝内には多量の遺物が投棄されていることから、居住区内の排水路的な役割があったのであろう。(藤田)

3. 動物遺存体の概要

以下では、出土した動物遺存体の各種について、出土量やそれぞれの特徴について記載する。今回、出土した動物遺存体は第1表に種名を示す。

第1表 種名表

硬骨魚綱 Osteichthyes	哺乳綱 Mammalia
コイ目 Cyprinida	食肉目 Carnivora
コイ科 Cyprinidae	イヌ科 Canidae
コイ <i>Cyprinus carpio</i>	ホンドキツネ <i>Vulpes vulpes</i>
両生綱 Amphibia	イタチ科 Mustelidae
無尾目 Anura	ホンドテン <i>Martes melampus</i>
無尾目の一種 Anurafam., gen. et sp. indet.	偶蹄目 tiodactyla
鳥綱 Aves	イノシシ科 Suidae
キジ目 Galliformes	イノシシ類 <i>Sus scrofa</i>
キジ科 Phasianidae	シカ科 Cervidae
キジ <i>Phasianus colchicus</i>	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
ニワトリ <i>Gallus gallus</i>	ウサギ目 Ragomorpha
キジ科の一種 Phasianidae gen. et sp. indet.	ウサギ科 Leporidae
カモ目 Anseriformes	ニホンノウサギ <i>Lepus brachyurus</i>
カモ科 Anatidae	齧歯目 Rodentia
カモ亜科 Anatinae	ネズミ科 Muridae
カモ亜科の一種 Anatinae gen. et sp. indet.	アカネズミ <i>Apodemus speciosus</i>
スズメ目 Passeriformes	ネズミ科の一種 Muridae gen. et sp. indet.
スズメ目の一種 Passeriformes fam., gen. et sp. indet.	

(1) 魚類

硬骨魚類が計2点出土した。SD-106Bの第10層からコイの前頭骨（右）、主鰓蓋骨（左）が各1点である。大きさは、いずれも体長20cm程度と推定される。（丸山）

(2) 両生類

種を同定できないカエル亜目が、SD-106から8点、SD-106Bから1点、計9点が出土した。骨の大きさは小型種のもので、ニホンヒキガエル程度の大きさのものは出土していない。SD-106からは椎骨2点、肩甲骨（左）、上腕骨（右）、大腿骨（左）、腸骨（右）、脛・腓骨が1点ずつ、SD-106Bからは腸骨（右）が出土した。（安部）

(3) 鳥類

SD-106から13点、廃土から1点、計14点が出土した。安部の所有する比較骨標本との肉眼比較で同定した結果、分析対象としたすべての骨で目以上を単位とした同定ができた（第2表）。キジ科（キジとニワトリを含む）、カモ科（カモ亜科）、スズメ目が確認された。

キジ科はSD-106第4層から9点、廃土から1点の計10点が出土した。江田・井上⁽¹⁾の基準から、SD-106出土の足根中足骨は内側足底稜がないことからニワトリと同定された（第5図-1）。この足根中足骨には距突起が確認されている。また、SD-106出土の大腿骨では大転子含気窩が確認されずニワトリもしくはヤマドリと同定できた（第5図-2）。この大腿骨は両骨端の形成が不完全な若鳥の骨であった。このほかにも寛骨3点（最少部位数は1）で、骨端の癒合していないキジ科資料が認められている。一方、廃土から出土した大腿骨は大転子含気窩があるキジと同定できる資料であり⁽²⁾、火を受けて白色化していた。前述の足根中足骨とニワトリもしくはヤマドリの大腿骨はミカドキジの標本より大きい資料、SD-106出土の指基節骨は同標本とほぼ同大の資料、他はアカヤマドリとほぼ同大の資料であった。

スズメ目はSD-106の第4層から2点、第8層から1点の計3点が出土した。すべてトラツグミ標本よりかなり小さい資料であった。

カモ亜科はSD-106第4層から脛足根骨が1点検出された。オナガガモより小さい資料であった。いずれの分類群でも、明瞭な解体痕や加工痕、骨髓骨様の交織骨は認められなかった。（江田）

(3) 哺乳類

小型哺乳類

種まで同定できた小型哺乳類は5科13点であり、遺構・部位別の出土量を第3表に示した。

SD-106から出土した哺乳類はニホンノ

第2表 第58次調査から出土した鳥類

遺構	層位	分類群	部位	残存		度数
SD-106	4層	ニワトリ	足根中足骨	右	w	1
		キジ科	寛骨	右寛骨臼、腸骨、坐骨		1
				左坐骨		1*
				連合仙椎		1*
				手根中手骨	右	w
			左		w	1
			大指基節骨	左	w	1
				大腿骨	右	s-d
			左		w	1*
		カモ亜科	脛足根骨	左	s-d	1
		スズメ目	手根中手骨	左	w	1
			大指基節骨	右	w	1
SD-106B	8層		上腕骨	左	p	1
廃土		キジ	大腿骨	左	p-s	1
総計						14

w: 完存、p: 近位端、d: 遠位端、s: 骨幹部、*: 骨端未癒合もしくは形成不完全

ウサギ10点、アカネズミを含むネズミ科2点、ホンドキツネとホンドテンが各1点である。ニホンノウサギの下顎骨の大きさは、安部が所有する現生標本とほぼ同大であった。ネズミ科の骨は出土数が多かったが種の同定が可能な下顎骨と臼歯が遺存していたものはアカネズミの1点のみであった。しかし、同定できなかったネズミの出土骨は全て小型種の大きさと、大型種のイエネズミに匹敵する大きさの骨は出土していない。また、ノウサギの上腕骨、腰椎、尺骨と踵骨ならびにテンの肩甲骨が焼けた状態で出土している。これらの焼骨も他の骨と同様にSD-106から出土している。

SK-101からはニホンザルの左大腿骨が1点のみ出土し、小転子の下方で切断されていた。ニホンザルが出土した遺構は大和第Ⅳ-1様式であり、SD-106から出土した動物遺存体とは時期が異なっている。(安部)

大型哺乳類

大型哺乳類は種類を同定したものがイノシシ類とシカであり、計152点を数える(第3表)。これら種同定したもの以外に、破片の大きさからイノシシ類あるいはシカと思われる破片が53点出土している。

イノシシ類は、SD-106から頭蓋骨10点、椎骨9点などが計58点出土しており、乳歯段階の顎骨や骨端が癒合していない幼獣が多数含まれる。また、下顎骨、椎骨、四肢骨などに解体痕が、頭蓋骨や寛骨などにイヌと思われる咬痕が見られる。SD-106Bから頭蓋骨6点、椎骨5点などが計34点出土しており、骨端が癒合していない幼獣が含まれる。また、四肢骨には解体痕や肉を削いだ痕跡が見られる、椎骨のうち1点の第6頸椎には叩き切ろうとした深い傷が見られる。SD-201から上腕骨、大腿骨3点ずつなどが計17点出土した。四肢骨の大部分は、骨端が癒合していない幼獣であり、橈骨に解体痕がみられる。SK-101から遊離歯3点、寛骨2点などが計14点出土しており、遊離歯のうち1点は加工痕が見られるメスの犬歯である。また、左尺骨には刃物による解体痕が、踵骨には解体痕とイヌと思われる咬痕が見られる。SK-107から尺骨、指骨が各1点、計2点が出土した。SK-109から遊離歯、中手骨が各1点、計2点が出土した。SK-110から、距骨が1点出土した。SK-111から、上腕骨が1点出土した。SK-114から肋骨、脛骨が1点ずつ、計2点が出土した。いずれも骨端が癒合していない幼獣である。SK-201から椎骨、中足骨が1点ずつ、計2点が出土した。

シカは、SD-106から椎骨3点、上腕骨2点などが計10点出土しており、骨端が癒合していない幼獣を含む。上腕骨や距骨に解体痕や肉を削いだ痕跡がみられ、寛骨には穴が穿たれている(第6図-1)。また、尺骨は被熱して褐色を呈する。この穴の平面形態は隅丸の三角形を呈し、7.5×6.3mmの大きさである(第6図-2)。SD-106Bから上腕骨と椎骨が各1点、計2点が出土しており、いずれにも解体痕が見られる。SK-101から、枝角、大腿骨などが各1点、計3点が出土した。枝角は被熱して褐色ないし黒色を呈する。また、大腿骨は螺旋状に破損しており、イヌと思われる咬痕が見られる。SK-109から枝角が1点出土しており、加工品であるが、機能や用途は明らかでない。SK-110から下顎骨、橈骨などが各1点、計5点が出土した。橈骨は被熱して黒色を呈する。

(丸山)

第3表 哺乳類集計表

遺構	種類	頭蓋骨		下顎骨		椎骨	仙骨	肩甲骨		上腕骨		橈骨		尺骨		寛骨		大腿骨		脛骨		踵骨		距骨		その他	計
		左	右	-	左			右	-	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		
SD-106	イノシシ	3	7		1	1	9	1			2	1		1	1		1	1	2	2	1		1		遊離歯10, 肋骨(左)1, 中手骨1, 腓骨(右)1, 中足骨(左)3, 中手/中足骨1, 指骨2	58	
	シカ						3	1		2					1	1						1					
	ニホンノウサギ			1			1			1				1	1						1				遊離歯3	10	
	ホンドテン								1																	1	
	アカネズミ					1																				1	
SD-106B	イノシシ	2	3	1		5	1		2	1	1	1				1	3	3	2	1	1	1	1	1	遊離歯2, 中足骨(右)2, 指骨1	34	
	シカ					1			1																	2	
	ホンドキツネ										1															1	
	ネズミ科					1																				1	
	イノシシ								1	1	2	1	1	1	1	1		2	1	1	1	1	1	1	手根骨1	17	
SK-101	イノシシ	1				1								1	1	1	1	1	1			1			遊離歯3, 肋骨(左)1, 指骨2	14	
SK-107	シカ																	1							枝角1, 中手骨/中足骨1	3	
	イノシシ														1										指骨1	2	
SK-109	イノシシ																								遊離歯1, 中手骨(左)1	2	
	シカ																							枝角1	1		
SK-110	イノシシ																						1			1	
	シカ			1									1												遊離歯1, 手根骨(左)1, 指骨1	5	
SK-111	イノシシ										1															1	
SK-114	イノシシ																		1						肋骨(左)1	2	
SK-201	イノシシ					1																			中足骨(右)1	2	

4. 考察

唐古・鍵遺跡第58次調査で出土した動物は、魚類のコイ、両生類のカエル類、鳥類のニワトリを含むキジ科、カモ科、スズメ目、哺乳類のニホンノウサギ、アカネズミを含むネズミ科、ホンDIGツネ、ホンDテン、イノシシ類、シカである。これらの大部分は区画溝であるSD-106およびSD-106Bから出土しており、食用となるものが多い。

出土した破片数では哺乳類が大部分を占め、イノシシ類が卓越する。小型哺乳類ではニホンノウサギが比較的多い。大型哺乳類と比較すれば少数に留まるが、その毛皮は貴重な資源であったと考えられる。SD-106・106Bから出土したイノシシ類とシカの量比はおよそ8:2であり、イノシシ類が圧倒する。イノシシ類は乳歯段階の顎骨や、骨端部が癒合していない四肢骨を多く含み、約半数が幼獣のものである。唐古・鍵遺跡のイノシシ類は大部分がブタであることや⁽³⁾、家畜化を示す個体が含まれることが指摘される⁽⁴⁾。当資料に含まれる頭蓋骨や下顎骨などは破片ばかりで、形態によって野生イノシシとブタを区別することは困難である。しかし、池上・曽根遺跡において幼若獣が多いことによって飼養個体の存在が指摘されるように⁽⁵⁾、当資料中にも飼養個体が含まれる可能性がある。

SD-106から出土したシカの寛骨に見られる穿孔は、平面形がシカの中手骨や中足骨を素材とする刺突具や骨鏃の断面形に酷似している。石鏃が刺さった場合に扁平な菱形の断面形を呈するのとは異なる。傷を負ってなお、生存していた場合にみられる傷の周囲の骨増殖は生じていない。深い傷であるが、穿孔部位は寛骨であるため、致命傷とは考えにくい。しかし、後肢の動きの妨げとなり、捕獲されたのであろう。このほかにSD-106・106Bから出土したイノシシ類やシカの骨には解体痕が多くみられる。同じ奈良盆地に位置する縄文時代の橿原遺跡から出土したものに比べ、解体痕が確認できる頻度が高いように思われる。このことは金属器の使用と関連しており、金属器は石器より鋭く切れるため、骨に傷がつきやすくなった結果と捉えたい。

今回の資料で最も注目されるのは、弥生時代中期に比定される区画溝からニワトリの骨が出土したことである。弥生時代のニワトリの骨はこれまでに唐神遺跡（長崎県壱岐市：中期～後期）、原ノ辻遺跡（同：中期～後期）、酒見貝塚（福岡県福岡県大川市：後期）、塚崎東畑遺跡（福岡県久留米市：中期～後期）、朝日遺跡（愛知県清洲市および名古屋市西区：後期）から報告されている⁽⁶⁾。また、宮ノ下遺跡（大阪府東大阪市）でも明らかなニワトリの脛足根骨が弥生時代中期末～古墳時代中期の包含層で、ニワトリの可能性のある大腿骨が弥生時代中期の包含層で検出されている⁽⁷⁾。日本ではこれまで縄文時代の遺物包含層からの確実な出土例はないため、ニワトリは弥生時代に弥生的要素の一つとして日本に導入されたと考えられてきた⁽⁸⁾。一方で、これまでの検出例では弥生時代中期と後期の遺物が混在する包含層や遺構から出土していたため、弥生時代のいつごろからニワトリが日本で利用されていたのかは特定できていなかった。今回ニワトリと同定した足根中足骨は、共伴遺物から弥生時代中期（大和第Ⅱ-3様式）に特定できる区画溝から出土したものである。日本へのニワトリの導入が弥生時代中期まで遡ることを示す貴重な資料といえる。

今回確認された足根中足骨でも距突起が認められた。弥生時代の遺跡からはこれまでに唐神遺跡で2例、朝日遺跡で1例ニワトリの足根中足骨が検出されており、そのすべてで発達した距突起が

認められている⁽⁹⁾。ニワトリの距突起は基本的に雄に特異的に形成される構造であるため、これらの足根中足骨は雄のものと考えられる。これは江田⁽¹⁰⁾の指摘した性別の顕著な雄への偏りを補強するデータといえる。また、唐古・鍵遺跡出土の足根中足骨の近位端幅（BP）と全長（GL）⁽¹¹⁾を唐神遺跡や朝日遺跡出土の弥生時代のニワトリ、自然環境下で捕獲された「野生セキショクヤケイ」、動物園や実験施設で飼育されていた「飼育セキショクヤケイ」およびさまざまな品種の「ニワトリ」と比較すると、そのサイズ・プロポーションは朝日遺跡出土のニワトリと極めてよく類似していた（第7図）。唐古・鍵遺跡で利用されたニワトリも、江田⁽¹²⁾が弥生時代のニワトリの特徴として指摘した「体サイズはセキショクヤケイと類似しており、家畜化は「飼育セキショクヤケイ」よりわずかに進展していた程度」によく合致しているといえる。

キジ科の資料として、骨端が未癒合もしくは骨端の形成が不完全な大腿骨と寛骨が出土したことも注目すべき結果といえる。とくに大腿骨は大転子含気窩のないヤマドリもしくはニワトリの骨であった。仮にこれらの骨がニワトリのものであれば、唐古・鍵遺跡では弥生時代中期にすでにニワトリの繁殖がおこなわれていたことになる。今後、コラーゲンタンパク分析、古代DNA分析を実施して、これらの骨がニワトリのものかを検討する必要があるだろう。（江田・安部・丸山）

5. おわりに

今回は、唐古・鍵遺跡第58次調査で出土した動物遺存体について、各種の同定結果を報告した。これまで唐古・鍵遺跡の動物遺存体について、特定の分類群について報告されてきたが、各遺構における動物種構成を明らかにする最初の報告となる。第58次調査で検出した区画溝S D-106・106 Bからは多数の動物遺存体が出土しており、魚類、両生類、鳥類、哺乳類を確認した。大部分は食料残滓と考えられるが、毛皮や羽毛、骨や角もまた資源として利用されたであろう。特筆されるのは、弥生時代中期と比定されるニワトリの出土であり、初期的な家禽の飼育を物語る貴重な資料である。一方、従来から注目されるブタの家畜化については、当資料から詳細を知るには不十分であった。今後、家畜・家禽を含む動物利用を他地点の資料と比較検討する必要がある。（丸山）

註

- (1) 江田真毅・井上貴央2011「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』第28号 動物考古学研究会 pp.23-33
- (2) 註1と同じ。
- (3) 西本豊弘1991「弥生時代のブタについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集 国立歴史民俗博物館pp.175-194
- (4) 安部みき子1996「イノシシとブタを考える」『卑弥呼の動物ランド』大阪府立弥生文化博物館pp.88-93
- (5) 金子浩昌・牛沢百合子1980「池上遺跡出土動物遺体」『池上・四ツ池遺跡』第6分冊 自然遺物編（財）大阪文化財センター pp.9-32
- (6) a：黒田長久1959「壱岐島及び山口県から出土の鳥骨について」『日本生物地理学会会報』21 日本生物地理学会pp.67-74
b：西本豊弘1993「弥生時代のニワトリ」『動物考古学』第1号 動物考古学研究会pp.45-48

- c : 西本豊弘1994「酒見貝塚の動物遺体」『大川市文化財調査報告書 第1集 酒見貝塚：大川市大字酒見所在貝塚の調査概報』大川市教育委員会pp.65-70
- d : 西本豊弘1997「塚崎東畑遺跡出土の動物遺体と鹿角加工品」『塚崎東畑遺跡：三潞町大字高三潞字塚崎東畑所在遺跡の調査県道宮本・大川線関係埋蔵文化財調査報告書』福岡県教育委員会pp.99-103
- e : 西本豊弘・佐藤治・新美倫子1992「朝日遺跡の動物遺体」『朝日遺跡2 自然科学編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集 愛知県埋蔵文化財センター pp.207-212
- f : 納屋内高史・松井章2009「カラカミ遺跡2007・2008年度調査出土の動物遺存体」『沓岐カラカミ遺跡Ⅱ－カラカミ遺跡東亜考古学会第1地点の発掘調査－』宮本一夫編 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室pp.131-142
- g : 江田真毅2014「カラカミ遺跡2011年度および2013年度調査出土の鳥類遺体について」『天手長男神社遺跡・市史跡 カラカミ遺跡2次』田中聡一・松見祐二編 沓岐市教育委員会pp.181-189
- (7) 江田真毅・別所秀高・井上貴央2014「大阪府宮ノ下遺跡出土資料からみた先史時代の河内平野における鳥類利用」『動物考古学』第31号 日本動物考古学会pp.21-32
- (8) a : 註6のbと同じ。
- b : 新美倫子2009「弥生文化の家畜飼育」『食料の獲得と生産』弥生時代の考古学5 設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編 同成社pp.95-103
- (9) 註6のe、f、gと同じ。
- (10) 江田真毅2016「家畜化に伴う骨形態の小進化と弥生時代のニワトリ」『動物考古学』第33号 日本動物考古学会pp.49-61
- (11) 計測は以下に倣う。
- Driesch, A., 1976. A guide to the measurements of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletin, 1: 1-136.
- (12) 註10と同じ。

